

侵入害虫 チャトゲコナジラミについて

東南アジアから東アジアにかけて生息し、中国ではチャの重要害虫の一種とされてきました。

国内では2004年に京都府の茶園で初めて発生が確認されて以来、現在は九州～関東までチャ産地で発生が拡大しています。当初はミカントゲコナジラミのチャ系統と考えられていましたが、別種である事が判明し、中国由来の侵入害虫と考えられています。

本県でも、加賀市や七尾市の茶園で発生が確認され今後の拡大が懸念されます。また、チャの他にサザンカ、ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ、シキミ等にも寄生するので、注意が必要です。

1. 特徴

(1)成虫

年3～4回発生し、体長は0.9～1.3mm、体色は橙黄色、前翅は紫褐色（灰色に見える）で不整形の白紋があり、セミを大変小さくした様な形をしています。寿命は2～4日で雌はその期間に卵を葉裏に産み付けます。

(2)卵、幼虫

卵は淡黄色の曲玉状で長径は0.2mmで葉裏に産み付けられます。

幼虫は1齢～4齢期を経て成虫になり、体長は1齢で0.3mm、4齢で0.8～1.2mm程度です。移動できる発育段階は1齢期のみで、2～4齢期は足が退化するので葉裏で定着生活を営みます。定着すると光沢のある黒色の小判状になり周囲に白色のロウ物質が現れ、黒色に白ふちの体色になり肉眼でも確認できるようになります。

越冬は卵や幼虫でしますが、寒さが厳しい場合は卵、若齢幼虫の多くが死亡するため、越冬率が低下します。

2. 被害

(1)成虫

新芽に群生し、吸汁加害します。

多発時期と茶摘みの時期が重なると、作業者の顔の周りに大量に飛翔するので作業の妨げになります。

(2)幼虫

下位葉の葉裏、すそに寄生し吸汁加害により多量の甘露を排泄し、すす病を誘発します。すす病が発生していたら、既に高密度で発生している可能性があります。寄生密度が著しく高い時に、干害や寒害、他の害虫による加害などと重なると落葉する場合があります。



幼虫の寄生により発生した「すす病」



病虫害防除室と農林事務所による現地調査

3. 防除

基本的に幼虫に対して行います。

(1) 耕種的防除

茶の摘採後の剪枝作業で、寄生葉を除去します。剪枝やすそ刈り等の管理により、葉と共に多くの卵、幼虫を除去します。なお、刈落とした葉より成虫が羽化する場合があるので、葉は焼却または埋設します。

(2) 薬剤防除

葉層深部まで薬剤が行き渡るように、散布前に剪枝、すそ刈りをしておきます。ラベルの記載事項や最新の登録情報を確認してから、農薬を使用しましょう。

①多量に発生していた成虫がほとんど目立たなくなった時期に散布（若齢幼虫期）

目安は5月下旬頃（一番茶を摘採後）7月下旬頃、9月下旬頃

卵と若齢幼虫が混在しているため、「ダニゲッターフロアブル」「アプロードエースフロアブル」「ハチハチ乳剤」等の殺卵効果のある薬剤を散布します。

②秋～冬期に2回（11～3月 萌芽4週間前まで）「トモノールS」等のマシン油剤を散布すると、幼虫は気門が塞がれ窒息死します。

※赤焼病の常発茶園や幼木園では使用を避ける。

※古葉に薬害（油浸）を生ずることがある。

※銅剤との近接散布で薬害の恐れがある。